

第4回野菜需給・価格情報委員会消費分科会の概要

1 日時

平成24年3月1日（木） 14:00～16:00

2 場所

独立行政法人農畜産業振興機構 南館1階会議室

3 概要

(1) 特にお聞きしたい論点（資料1）の説明

資料1により説明。

(2) 最近の野菜の需給・価格動向について（資料2）の説明

・キャベツは、愛知、千葉、神奈川、茨城が主産地。価格は、12月中旬以降、平均価格を上回り推移。東京都中央卸売市場への入荷量は、前年より増加傾向であるが、価格は前年を上回っている。

・だいこんは、神奈川、千葉が主産地。価格は、1月中旬までは平年並みで推移していたが、1月下旬以降、価格は平均価格を上回り、現在も高値で推移。東京都中央卸売市場への入荷量は、1月中旬までは順調な入荷となったが、1月下旬以降、前年を下回り推移。

・たまねぎは、北海道の貯蔵ものが出荷される時期。価格は、平均価格をやや上回り推移。東京都中央卸売市場の入荷量は、22年産が不作であったことから、前年を上回っているが、平年よりは少ない状況が続いている。

・にんじんは、千葉、埼玉、北海道が主産地。価格は、1月下旬以降、平均価格をやや上回り推移。東京都中央卸売市場の入荷量は、12月中旬以降、前年を上回り推移している。

・はくさいは、茨城、群馬、兵庫が主産地。価格は、2月中旬以降、平均価格を上回り推移。東京都中央卸売市場の入荷量は、前年並み又は前年を上回り推移。

・レタスは、静岡、香川、茨城、兵庫が主産地。価格は、12月中旬以降、高値傾向となり平均価格を上回って推移。東京都中央卸売市場の入荷量は、前年を上回っているが、平年よりは少ない状況となっている。

(3) 野菜の消費関連資料（資料3）の説明

・1人当たり購入数量は、生鮮全体では、昨年4月から5月までは前年を上回った。6月は若干前年を下回ったが、7月以降は価格が落ち着いていたこと

から前年を上回って推移。12月は価格が高騰したことから、前年を下回った。

だいこんとはくさいは、7月から8月頃までの夏場に消費が減少する傾向にある。特に、はくさいは、春から秋口まで消費が著しく減少する。

・1人当たり購入金額は、生鮮全体では、4月から6月までは、前年に春野菜が高騰したことから、前年を下回って推移。特に、11月は、卸売価格が低迷したことにより、全品目で前年をかなり下回った。

だいこんとはくさいは、1人当たり購入数量と同様に夏場に減少する傾向にある。

・過去10年間における1人当たり年間購入数量等は、生鮮野菜全体では、年によって変動が見られるが、消費者物価指数とは、概ね逆の動きが見られる。

キャベツは、2005年以降、増加傾向となっているが、だいこんは減少傾向となっている。

品目毎に年齢階級別にみると、キャベツは、2005年以降、各年代において増加傾向。だいこんは、各年代において減少傾向で、特に20～40代の消費の減少が著しい。

・小売価格は、キャベツ、だいこん、はくさい、レタスは、一昨年、春野菜の価格が高騰した影響により、4月から6月までは前年を大幅に下回った。また、レタスは、降雨及び台風の影響により、9月に高騰。はくさいは、降雨の影響により10月に高騰。たまねぎは、2年連続で主産地が天候不順であったことから、5月まで前年を上回ったが、6月以降、府県産が豊作であったことから、前年を下回って推移。にんじんは、6月以降、順調な出荷により前年を下回って推移。

・野菜の年齢階級別摂取量は、依然として目標としている1日350グラムには届いておらず、20代、30代、40代が少ない水準となっている。摂取量が一番少ない20代の野菜摂取量は年々減少傾向となっている。

・家計での外食支出金額は、5月以降、回復傾向となっていたが、12月はやや前年を下回った。

・外食店の売上高及び利用客数は、10月以降、利用客数は前年を上回り、売上高は前年並み又は上回って推移。

・3月から5月までの天気は、気温は平年並みか高く、降水量は、3月は平年並みか多くなり、4月から5月までは平年並みか少なる見込み。6月から8月までの天気は、気温は平年並みか高く、降水量は平年並みの見込み。ラニーニャ現象は春までの間で終息する可能性が高い。

(4) 24年産春野菜の需要・消費動向の見通しに関する各委員からの意見

① 野菜全体の目下の消費動向

ア 景気、天候等の要因による消費動向

- ・ 11月及び12月前半の気温が高かったことによる前進出荷に加えて、その後の寒波等の影響により市場への入荷量が減少し、価格が高値となった。小売においては、単価が上がったため金額ベースでは好調であったが、数量ベースでは減少した。
- ・ 景気が減退している中で、価格が一定で、食べ残し等の無駄の少ないカット野菜が伸びている。
- ・ カット野菜の提供においては、原料となるキャベツやレタスが天候不順で品質が悪く、歩留まりが悪い中で価格を変更せずに販売しているため、供給事業者はかなり苦労している。

イ 震災や原発事故の影響による消費動向

- ・ 冬場の産地は、関東より西が中心であることから、影響はほとんどなかった。
- ・ 寒い時期には鍋物需要で通常売れるしいたけが伸びていないが、これは一部地域の原木しいたけが出荷制限となっている影響ではないか。他のきのこの販売は通常どおりである。

ウ 野菜全体の販売状況

- ・ カット野菜を含めて加工・業務用のウエイトが急激に伸びている。
- ・ カット野菜の消費は、価格が一定であることからだけでなく、高齢者世帯や独身世帯の増加等を背景に簡便性を求める消費者のニーズにも合致し、従来以上に大幅に増加し、家計消費にも浸透してきている。
- ・ 野菜は198円を超えると極端に販売量が減少する傾向にある。
- ・ 通常1/4カットしているものをさらに1/6、1/8カットにしたり、鍋物用にざく切りにしたりして、商品を小口化している。

② 春野菜主要6品目の今後（4月～6月）の見通し

ア 全体（主要6品目）の傾向

- ・ 冬場は、西南暖地を中心とした西の産地の野菜が多かったが、春から夏にかけては原発事故の影響を心配する関東以北の産地が主流となり、消費者の反応が心配。数量確保の難しさやコスト高となるデメリットはあるが、消費者ストレス緩和のため西の産地との併売を行わざるを得ないのではないか。
- ・ 昨年は東日本大震災後の自粛ムードから、花見需要やレジャーを見込んだ販売戦略を打つことができなかった。今年は弁当、惣菜等を含めて春の食材を積極的に販売したい。

イ 春キャベツ

- ・価格高騰によるカット野菜へのシフトのみならず、簡便さが受けており、今春の販売にも期待がもてる。カット業者の技術向上も寄与している。

ウ 春だいこん

- ・冬が旬の食材だが、最近では春でも「す」の入らない品種ができており、春でもおいしい食材として販売していきたい。

エ たまねぎ

- ・春以降、兵庫産・佐賀産の柔らかい新たまねぎが出回る時期となる。品種にあわせた食べ方の提案も含めて積極的に販売していきたい。

オ にんじん

- ・直近の販売状況は思わしくない状況であったが、春以降は、徳島産・鹿児島産の新ものへの消費者の反応に期待している。

カ 春はくさい

- ・最近では黄芯系のはくさいが人気であるが、白芯系のはくさいも甘みがあつておいしい。春以降は、需要が減少する傾向にあるが、品種に合った食べ方を提案しつつ販売することが必要である。

キ 春レタス

- ・加工・業務用では、不作になると歩留りが悪化する。歩留りがいいアメリカ産の輸入を継続する動きもみられる。

③ その他の販売活動の動き

- ・気象変動等により野菜の生理障害が増え、歩留まりの低下にもつながっている。すべて廃棄するのではなく、可食部分は商品にするような取り組みが必要。

- ・カット野菜が伸びている一方で、生産が厳しい状況が続き産地が疲弊してしまっている現状がある。このままでは、加工・業務用の産地がつぶれてしまうのではと危惧している。加工・業務用需要が伸びている中で、加工用産地の育成が今後の大きな課題。

- ・加工用たまねぎについては、国産の供給状況に応じて輸入をさらに拡大することを検討。

- ・消費拡大を行うためには「簡便性」と「機能性」がキーワードになる。その場合、野菜の機能性については、一時的な情報に惑わされないことがないように「医食農連携」を確立し、医学的エビデンスをしっかりと構築することが必要。

- ・若年層においては、特に調理をしない傾向があり鍋物用具材がセットになった「野菜キット」が伸びる傾向にある。

- ・これから去年の東日本大震災を振り返るメディア報道等が増えるものと思

われる。防災意識の高まりから、備蓄できる保存性の高い野菜が一時的に伸びるのではないか。

- ・ 今後は60代～70代の「高齢・単身世帯」をターゲットにした販売戦略が必要と考えている。コンビニだけでなく、遠方のスーパーにも足を運んでもらうため、小量目化をさらに進めていくことが必要。

- ・ 食育は子供だけではなく、大学入学や社会人になるなど生活スタイルの変化があるタイミングで行うことが効果的ではないか。

(5) 野菜需給・価格情報委員会への報告

(4)の意見を小林座長が取りまとめ、各委員の了承を得た上で、3月12日開催の第12回野菜需給・価格情報委員会に報告することとなった。